

図書館だより

埼玉県立図書館

22号

秩父湖を望む

昨夜来ふり続いていた雪が上がり、あたりを覆っていた霧も、どうやら晴れてきたようだ。やがて、薄日も射してくることであろう。

奥秩父の冬は厳しい。夏には観光客の絶えないこの辺りも、今はひとりでひとりで人影がみえない。

時おり耳に届くのは、枝に降り積もった雪が落ちる音と、餌を求めているのである。小鳥のかすかな囁きのみ。あとはひたすら静寂の世界だ。良く晴れ上がった朝、山と湖は、雪と氷で最高に装った姿を見せてくれることがある。そんな場所に居合わせると、美しさに魅了されて、いつまでも佇んでしまうのである。(H)



(写真提供：篠原忠義氏)

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

物の見えたる光

田口 弘

詩とは、あらためて考えるまでもなく、生きるいのちの愛しみを表現したものである。そう言っても、その「生きるいのち」はなかなか捕捉しがたい。茂吉も短歌とはつまるところ「写生」だと言いきっている。そして写生とは、生を写すことだと東洋画論にふれている。そこで思いだす茂吉の初期の一首に、

萱草の小さき萌えを見ておれば
胸のあたりがうれしくなりぬ

というのがある。

万葉集も新古今も良寛の歌も、芭蕉、蕨村、一茶の俳句も、みなこの一点にかかわる。フェルメールやモッアルドの音楽もまさに同断である。昔読んだ小林秀雄の「モーツァルト」論も《かなしみ》の指摘だったように思いだす。いま六十二歳にしてモーツァルトに出会い、早逝した彼の交響曲38・41番を繰り返し聴きながら

がら万葉集卷十一や十二の作者不詳の相聞歌や、卷十四の東歌のかなしみの共鳴にむしる驚いている。芭蕉は「赤冊子」のなかだったと思うが、句作りにについて

物の見えたる光、末だ心に消えざる中に云いとむべし

と言っている。光とは前述した、捕捉しがたい《いのち》の謂だろう。心にくい表現である。ここに創作者は昔から生命を賭けてきたと言つてよい。《物の光》はそれほどの代償を強いてきた。芭蕉が「俳諧とは万葉集の心なり」とか、その故に「古書、選集に眼を晒すべし」と語っているように、この国の文学でいえば、万葉集以前、記紀の歌謡にさかのぼり、連綿として、ものに乗り移ったいのちの《光》に執して、身を細め息を密め、自らの生命を燃やしてきた。

文化十一年、五十二歳で一茶はこんな句を書きとめた。

秋の蟬ころびて落ちて又鳴きぬ
二年後、五十四歳のとき

仰のけに寝て鳴きにけり秋の蟬
さらに二年後

仰のけに落ちて鳴きけり秋の蟬

と、足かけ五年を経て、やっと《見えたる実感》をすくい取ることができた。五十一歳で父の遺言により家の半分を手にし、翌年ふるさと柏原で、やっと妻をめぐり、五十六歳のときは一年二か月の長女サトを死なせている。そんな一茶の晩年のかなしみが一語に凝みとおつていく。

秋の蟬にいま見た光を五年も執着して、あやうく写しとるという営みこそ、まさに作家の安眠であろうか。さらに《物の見えたる光》といえども、もともと純粹に素直に、いのちそのものにじかに向い合っていた八木重吉の詩を思いだす。昭和のはじめ、二十九歳で死んだ彼は中学の英語教師だった。

あかつちの
くずれた土手を見れば
木のねつこがさがつてた
いきをのんでとおつた
○
すべてのものすえはいい

竹にしろ
けやきにしろ
そのすえが 空にきえるあたり
ひどくしずかだ

なぜ《息をのんで通った》のか、なぜ《ひどく静か》なのか。そこに光のようないのちの実体はふれたからではないのか。重吉の純粹ないのちのいきづかいが伝わってくる。

それがそのまま詩のかたちに流露している。こんなに透明で、やさしく愛しい詩をほかに知らない。彼には『貧しき信徒』という詩集もあるほど、敬虔なキリスト者としてその生を全うした。詩はそのまま神を呼ぶ祈りであった。芭蕉が遷化する年、門人に「子どもする事に心を付けよ」と教え、また「俳諧は三尺の童子にさせよ」と、うぶでナイーブな初心の大切さを遺語された。そのあたりの消息を重吉の《詩》に見る思いだ。

《物の見えたる光》はそんな心の集注と燃焼のとき、文学の核となるその《生》をかいま見せるにちがいない。

(東松山市教育長)

第六回「本を読む」

県民のつどい

十三の読書会、
五文庫が表彰される

前日の雨もあがり、読書の秋にふさわしい日となった十一月十六日、第六回「本を読む県民のつどい」が春日部市民文化会館で開催されました。

今年度は、読書感想文の表彰にかえて、すぐれた活動をしている読書グループ、文庫で各市町村教育委員会から推薦されたもののうち、別記18団体が表彰されました。

「つどい」は、主催者側のあいさつに始まり、来賓の祝辞、読書グループ・文庫の表彰、つづいて読書推進運動協議会からの優良読書グループ表彰の伝達が行われました。

そのあと表彰を受けた蓮田市の「綾瀬会」と、白岡町の「ひしのみ文庫」から、日頃の活動状況を、具体的な例をまじえて、事例発表が行われました。休憩をはさんで、早乙女資氏による「歴史の転換期の女性達」と題する記念講演があり、主として幕末から明治初期にかけて活躍した女性たちについてお話を伺いました。

内容は、現代女性にも及び広い範囲にわたり、歴史の転換期にかかわった人たちの生き方にふれられ、大変なごやかなうちに参会者一同深い感銘を受けました。



読書グループ及び家庭文庫
表彰団体名 (敬称略)

●読書会

芝北読書会(川口市) 子どもの本をよむ会(朝霞市) 西大和あんりこ(和光市) ねぎぼうず読書会(川越市) 西所沢読書グループ(所沢市) 白菊読書会(熊谷市) 小鹿野町読書会(小鹿野町) あおい読書会(深谷市) やわらぎ読書会(深谷市) あやグループ(加須市) 羽生読書会(羽生市) しらつる読書会(岩槻市) 綾瀬会(蓮田市)

●文庫

ひかり文庫(志木市) なかよし文庫(新座市) 青木文庫(飯能市) 鳩ヶ丘文庫(鳩ヶ丘) ひしのみ文庫(白岡町) [表彰順]

県内図書館めぐり

北本市立中央図書館

北本市立中央図書館が郵便局の旧庁舎を使って図書館法上の公共図書館としてスタートしたのは、昭和四十九年八月であった。

以来満十年目を迎えて今年四月二十一日に北本市文化センター内に中央図書館として新築オープンした。

延床面積は二、三二五㎡、五万冊の本を収納できる一般図書(調べものコーナー・新聞雑誌コーナー・レコードカセットコーナーを備えている)、「二万冊の児童書を収納できる児童コーナー」と子供たちを対象とするお話し会、絵本の読みかせ、読書会等のグループの会合の場として朗読集会室を設けている。

また、地階には、積層の開架書庫(約五万冊収納可能)を設置している。開館後の利用状況もおおむね順調で、登録者数一三、六五九人で、当市の人口五七、四七一人(59・9・1現在)に対し、約二十三・七%の登録率、利用者数五三、〇五六人、貸出冊数(団体を除く)一一六、五〇一冊で市民一人当たり二冊の水準をこえることができた。

今後の運営においては、この施設が公民館との複合施設であることから、複合施設の特徴を生かし、公民館との事業面での連携を密にした活動をすす



児童コーナー

所在地 北本市本町二二二
TEL (〇四八五)九二一〇七九五

埼玉の文学 埼玉の詩人たち

▽3△

蔵原 伸二郎

孤高の詩人、蔵原伸二郎の詩碑が、飯能市の天覧山への登り口に建っている。詩碑は御影石の台石の上に、高さ三、五米、幅一米、厚さ二十厘米の仙台石の板碑で、伸二郎の詩の頂点に立つ、詩集「岩魚」の巻頭の詩「めづつね」の一節

野狐の背中に雪がふると
狐は青い影になる
山から一直線に走って来る
その影

が刻まれている。昭和四十一年九月に建てられたもので、碑の周囲には、伸二郎が好きだったサツキや玉イブキが植えられている。
伸二郎は明治三十二年九月四日、熊本県阿蘇郡黒川村（現・阿蘇町）に生まれた。父惟曉の三男で本名は惟賢（これかた）。阿蘇神社の直系で阿蘇氏の一族であり、母は北里柴三郎の妹である。七歳の時、父は子供の教育のためにと、一家をあげ



て熊本市に移る。熊本の中学院、九州学院に学ぶ。大正八年、慶応義塾文科入学。両親、妹と共に東京・品川区上大崎に居住する。十二年、慶応義塾卒業。十三年、大塚辻町に下宿。夏、「東洋の満月」の詩稿のほとんどを一気に書く。萩原朔太郎、日夏耿之介に師事。十月、千本良康子と結婚。阿佐谷駅南に住む。十四年、詩稿の一部と評論「猫。青猫。萩原朔太郎」を「葡萄園」に発表。短篇小説を書き始める。
昭和二年二月、小説集「猫のふる風景」刊行。三年、「文芸都市」に参加。六年、小田嶽夫らと「雄鶏」刊行。八年、杉並区馬橋に住む。九年、保田与重郎の嘱により、「東洋の満月」の詩稿を「コギト」に連載（九年九月号より十年八月号）。朔太郎の激賞を受ける。十一年、朔太郎の請により、「定本青猫」の巻末に「猫。青猫」

萩原朔太郎。収載。世田谷区奥沢町に移る。十四年三月、第一詩集「東洋の満月」刊行。十月、小説集「目白師」刊行。十五年九月、随筆集「風物記」刊行。十六年「四季」に参加。十八年七月、第二詩集「戦間期」刊行。第三回日本詩人賞を受賞。十九年三月、第三詩集「天日の子ら」刊行。二十年三月、都下西多摩郡小曾木村（現・青梅市）に疎開。七月、埼玉県野村（現・飯能市）に移る。二十一年七月、第四詩集「唇の鬼」刊行。二十三年、飯能市内に移る。三十四年六月、「現代詩の解説と味ひ方」刊行。二十五年八月、「詩人の歩いた道」刊行。二十六年、埼玉県豊岡町（現・入間市）に移る。二十八年、飯能市河原町に落ち着く。二十九年五月、第五詩集「乾いた道」刊行。三十一年二月詩論集「東洋の詩魂」刊行。三十九年六月、第六詩集「岩魚」刊行。四十年、北里研究所付属病院入院。二月、「岩魚」が読売文学賞受賞。三月十六日、急性単核球性白血病で死去。享年六十六歳。墓は多摩墓地にある。十二月、「定本岩魚」刊行。四十一年、詩碑建立。四十二年五月、「蔵原伸二郎選集」全二巻が刊行されている。

埼玉の生活も、昭和二十年の四十七歳に始まり、病死する四十年の六十歳の二十年間である。しかし、埼玉に生き、埼玉の風物を詩に歌い、詩人としての頂点を示し、埼玉に没した詩人は他にいないのである。

きつね
狐は知っている／この目当たりのいい枯野に／自分が一人しかいないのを／それ故に自分が野原の一部分であり／全体であるのを／風になることも／枯草になることも／そうしてひとすじの光にさえることも／狐いろした枯野の中で／まるで／あるかないかの／影のような存在であることも知っている／まるで風のように走ること／光よりも早く走ること／知っている／それ故に／じぶんの姿は誰れにも見えないのだと思っている／見えないものが／考えながら走っている／考えだけが走っている／いつのまにか枯野に昼の月が出ていた

伸二郎は埼玉の飯能の風土と一体化し、永遠の詩の世界を詩集「岩魚」に結晶させたのである。
（日本ペンクラブ会員 榎本了）

東西南北

◎県立図書館の年末・年始の休館日
12月27日（休）～1月5日（休）

◎県立図書館特別休館
春季特別整理のため、次の期間休館となります。

○県立浦和・熊谷図書館
昭和60年2月20日（休）～3月1日（休）

○県立川越・久喜図書館
昭和60年3月6日（休）～3月15日（休）

ただし、移動奉仕、一般事務は平常どおり行っています。（熊谷・久喜は視聴覚課も行っていきます。）なお、休館日の図書返却は、入口にあるブックポストを御利用ください。

県立浦和図書館

●郷土を知る映画会

日時 12月22日（出） 14時

内容 「水害記録」・「埼玉ニュース」
11号～20号（昭和28年）

●レコードコンサート

日時 12月25日（出） 14時

内容 ベートーヴェン／交響曲第9番「合唱」

県立熊谷図書館

●おはなしとえいがのかい

日時 12月25日（出） 9時30分／13時30分

内容 「おはなし」とアニメーション「クオレ物語」・「ヘンゼルとグレーテル」

日時 1月7日（出） 9時30分／13時30分

内容 「おはなし」とアニメーション「わんぱくナージャの竜王退治」

日時 1月12日（出） 10時／14時

内容 「春男の翔んだ空」

日時 2月2日（出） 10時／14時

内容 「マタギ」

●ビデオコンサート

日時 12月22日（出） 14時

内容 「ノエルの不思議な冒険」

日時 1月26日（出） 14時

内容 「クリスタル・ブレイク」

日時 2月16日（出） 14時

内容 「サイモン＆ガーファングル イン・セントラルパーク」

●定例映画会

日時 1月18日（出） 12時15分

内容 「酒と健康」・「タバコの害を考える」
日時 2月15日（出） 12時15分

内容 「親子で語る愛と性」

県立川越図書館

●児童文化講座

日時 1月17日（出） 13時30分

講師 中村 柁子氏
演題 「絵本と子どものこころ」

●郷土を知る映画会

日時 12月20日（出） 14時

内容 「あなたの周りにみどり」
「新交通ニューシヤトル」
「歴史と遊ぶ」

●名作映画会

日時 1月12日（出） 14時

内容 「人情紙風船」

●新着フィルム映画会

日時 1月24日（出） 13時30分

内容 「父と子クオレの学校より」
「ぼくの熊おじさん」

※ いずれも先着50名

●県立久喜図書館

●著者を囲む会

日時 1月29日（出） 13時30分～15時30分

会場 越谷市「越谷コミュニティセンター（大ホール）」

講師 曾野 綾子氏
演題 「自己の発見」
対象 一般成人・学生

定員 一、七〇〇名

※申込み ハガキに会場名・住所・氏名・電話番号を明記のうえ、1月18日（消印有効）までに、県立久喜図書館（〒366 久喜市下早見85）へお申込みください。

●名画鑑賞会

日時 12月22日（出） 10時／13時30分

内容 「日本の熱い日々」・「謀殺・下山事件」

●冬休み子ども映画会

日時 12月26日（出） 13時30分

内容 「南極大冒険」・「とべんぼくの白鳥」

●家庭教育映画シリーズ

日時 1月10日（出） 13時30分

内容 「幼い心をどうしますか」
「まじめな話」

日時 1月24日（出） 13時30分

内容 「みなおそろわが子のしつけ」
「子どもの手・脳のはたらきをたかめる」

●レコードコンサート

日時 1月10日（出） 12時15分

内容 クロード・チャリ ベスト20
「禁じられた遊び」他

会場の記入がない場合は、いずれも主催館（印）が会場。詳細は県立各館まで。

読書グループの紹介

白岡町

「親子読書あゆみ会」

昭和四十五年十月に「親子読書あゆみ会」が結成され、十五年目になろうとしています。

創立者である渋谷公枝さんは当初自分の子供に本を読ませようと思っ



定例会

ていましたが、親子読書会や講演を聞いて勉強するうちに一人でも多くの子供たちに本好きになつてもらおうと考えるようになりました。

色々な人に子供との読書の大切さを話し、会員九名で発会のはこびとなりしました。会員は大変熱心で、毎回の会合にも欠席する人はほとんどなく、移動図書館から借りた本を自宅で読んで毎月感想を持ち寄つたりしました。二年目には会則を決め、年間行事を組み、年一回の文集を発行し、童話作家を招いての読み聞かせも行いました。

五十年頃には会員数も百六十名を数えるようになりましたが、その後

は年々減ってきてしまいました。しかし、年間行事の野外読み聞かせ・クリスマス会・文集の編集など楽しみながら力を合わせて続けてきました。一方、筋ジストロフィーやぜん息で苦しんでいる子供たちの県立黒浜養護学校へ図書を贈ったりしました。また、今年の四月には町に児童館が開設されたのを機会に、その協力を得て毎月の読み聞かせを行いました。七月には絵本作家の木村研光先生の指導のもとに子供たちの手作りの可愛い絵本ができあがりました。

心のふれあいを 元町婦人読書会

(加須市)

私たちの会は本好きの人たちが集まって出来た読書会ではありません。十余年前に町内会の仕事に少しでも主婦の力を役立てたいという人たちの気持から町内会婦人部として発足し、清掃・夏祭り・体育祭等の手伝いの他に独自に「コミュニケーション作りと心のふれあい」を目的として新年会と読書会を行うことから始まりました。

そのような生い立ちですから始めは少々苦労もありましたが、今では三十三名の皆さんが配本される日を心待ちにしてくださり、すっかり婦人読書会として定着しました。

年齢は大きな孫持ちの方から、子育て真っ最中の方までまちまちです。年に三、四回行う読書会は郷土史家や社会教育の先生を講師にお願いするときもあり、たまには皆で本の内容の一つのテーマを引き出し、それに対する考え、自分の経験談、批判や感動した事などをにぎやかに意見交換することもあります。近年お勤めの主婦が多く、いつも会員の半



「伊豆の踊り子」をたずねて

数ほどの集まりですが、町内会館の一室でほど良い話し合いができ、会の目的にそった集まりとして十分だと思つていきます。

月に一度位の割合でほとんど久喜図書館からお借りする本を使用してあります。人数が多いので二班に分けて配本し、評判の良い作品は交換して読むようにしています。また、朗読講習会を受講し、一字一句を理解しながら読書することの大切さを感じるとともに、ボランティア活動にも役立てていけたらと考えています。

色々な講演をお聞きしたり、作品のふろさと探訪とあわせて旅行もします。昨年は読書会結成以来初めて一泊で「奥の細道」の松島を訪れ、楽しい思い出がにじむ記録になりました。他の行事とうまく調和をとりながら元町に根ざした、いつまでも本を読むことの大切さを忘れないような会に育てていきたいと願っています。

(能登和枝)



本のひろば さいたまの地場産業

埼玉には古くから県民の生活と密接に結びついた地場産業がはびこられてきました。工業化社会のめざましい発展の中で、地場産業の世界では手仕事による生活用具を造り続け、その持ち味を伝えながら、埼玉の風土の感触として直接私たちの生活感情に訴えてきます。

今回は「資料展 さいたまの伝統産業」で展示された資料の中から紙幅の許す限り挙げてみました。地場産業についてより深い理解の一助となれば幸いです。

〇地場産業の世界

喜多院職人尽絵屏風 東出版 昭54
現代職人伝 大谷晃一著 朝日新聞 昭53

埼玉県地場産業実態調査報告書 埼玉県商工部編 昭56

さいたまの伝統的手工芸品 埼玉県商工部工業振興課編

さいたまの特産品 電通編 埼玉県

県民部文化課 昭50

新編埼玉県史 資料編 21 産業・経済 1 埼玉県編 昭57

日本職人技術文化史 上・下 田村栄太郎著 雄山閣 昭59

日本の地場産業 山崎充著 ダイアモンド社 昭52

〇狭山茶

狭山茶業史 大護八郎著 埼玉県茶業協会 昭48

狭山茶史考 中島幸太郎著 昭46

狭山茶場史実録 正・続 吉川忠八著 昭47

狭山茶の将来 埼玉県 昭25

茶の歴史 河越茶と狭山茶 大護八郎著 川越叢書刊行会 昭32

〇さいたまの名菓

熊谷の五家宝 沢田豊行著

埼玉県の米菓工業 一九七六 埼玉県食品工業試験場編 昭51

さいたまの味 埼玉商業観光課編

草加せんべいの由来 樋口清之述 昭42

日本名菓辞典 埼玉県 守安正著 東京堂出版 昭46

〇鯉のぼり・釣竿

鯉のぼりのふるさと 加須市観光協会 昭48

古老に釣竿の話をきく会 速記録 川口市教育局社会教育課 昭43

〇岩槻・鴻巣の人形

岩槻人形史 埼玉百年記念 岩槻人形連合協会編 昭46

古制鴻巣雛 鈴木常雄著・画 昭23

雛と人形 伊藤惣石著 鴻巣市節句品協会 昭49

〇さいたまの地酒

埼玉のお酒 埼玉県酒造組合編 昭53

地酒の旅 読売新聞社編 昭47

〇川口の鋳物

鋳物師 内田三郎著 埼玉新聞社 昭44

鋳物師と梵鐘とまいまい井戸の話 桜沢孝平著 武蔵野郷土史刊行会 昭56

鋳物の町 尾高邦雄著 有斐閣 昭31

鋳物むかしむかし 鈴木茂著 川口市勤労青年学級 昭45



〇行田のたび

行田足袋組合沿革史 細谷秋編 行田足袋商工協同組合 昭19

行田足袋工業百年の歩み 大沢俊吉著 行田足袋商工協同組合 昭46

足袋の話 足袋から見た経済生活 出井盛之著 多摩会 大13

〇春日部の桐たんす

春日部の特産品 春日部市民生経済部商工課 昭50

細工師 足立屋五代物語 初代・四代編 鈴木野勤著 建具芸社 昭37・41

埼玉県洋家具工業界診断資料 埼玉県商工部 昭36

〇安行の植木

安行の植木・苗木・切花 埼玉県植物見本園編

埼玉県の安行 埼玉県経済部編 昭10

埼玉の苗木植木 昭38・42・43 埼玉県編

特産の安行 埼玉県編 昭29

〇さいたまの織物

織物及莫大に關する調査 農商務省工務局 工政会出版部 大14 複写

熊谷染色の歴史 熊谷の染色を語る

会編 昭58

埼玉県南部織物工業の史的研究所

書き第一集 潮地ルミ著 昭50

織物工業の埼玉 昭和27年 埼玉県

経済部編 昭27

地場産業と地域経済 埼玉県羽生の

縫製工業 上・下 金倉忠之著 東

京市政調査会 昭51

飯能大島紬の歩み 飯能織物協同組

合大島紬部会編 昭59

○秩父銘仙

写真集 秩父機織 井上光三郎著

主婦と生活社 昭52

秩父織物史 秩父織物協同組合編

昭25

秩父銘仙 奏秀雄著 茜屋書房 昭

7 にんげん秩父 清水武甲写真集 清

水武甲著 春秋社 昭55

機織の女たち 聞き書き秩父銘仙

史 井上光三郎著 東京書籍 昭55

東書選書59

○さいたまの窯業

児玉町を中心とした瓦業分布に関す

る一考察 柳 進著 昭29

埼玉県窯業の概要 埼玉県経済部工

業課編 昭26

飯能焼 史の実態 塚谷見弘・益井

邦夫編 雄山閣 昭42

武州飯能焼考 師岡貞雄著 昭59

○小川の和紙

紙すきの里 正・統 柳橋真・牧野

和春共著 牧野出版 昭57

紙すきの村 文・仁科琴児 絵・市

川頼男 ポプラ社 昭47

武州紙特集号 工芸 第59号 日本

民芸協会編 昭10

埼玉県特産手すき和紙細川紙 小路

位三郎著 埼玉県製紙工業試験場

細川紙誌 細川紙技術者協会編 雄

松堂書店 昭55

細川紙手漉用具 秩父郡東秩父村教

育委員会編 昭45

和紙の旅 時と場所の道 寿岳文章

著 芸州堂 昭48

和紙要録 上・下 竹田悦堂著 文

海堂 昭46

編集後記

○図書館周辺には、詩・音楽・絵画の世界を通じて、物の見えたる光を説く、芸術全般に御座る深い田口教育長さんに、御執筆いただきました。

ゆつくり味読したいものです。

○埼玉の文字欄は、引き続き榎本了氏により、詩人の蔵原伸二郎を御紹介いただきました。埼玉にかかわりを持つ詩人として、日本に誇り得る人物と思えます。多くの著書が図書館に収蔵されておりますので御利用ください。

○干支(えと)の子(ね)の歳のせかせか過ぎ、やがて五(うし)歳にかかります。またもたでなく確実な歩みの半の年でありたいと祈念いたします。

は江戸時代になってからのことでした。

参考文献

「日本の児童遊戯」 中田幸平著

社会思想社

「日本社会民俗辞典」 誠文堂

新光社

「日本風俗史事典」 弘文堂

「世界大百科事典」 平凡社

ほか。

おたすねくだい

問 コマ(独楽)の名の由来について知りたい。

答 10世紀の和名抄に「独楽和名古末都久利(こまつくり)孔

(あな)あるもの也」とありま

す。「古末」は他に、「狗」、

「高麗」とも書かれますが、一

般には高麗という呼名が多かつ

たようです。中国に発生して朝

鮮(高麗)を経、日本に伝わっ

たことから付けられた名である

ようです。

また、「都久利」は独楽本来

の呼名で都无求里(つむぐり)

ともツグリとも言い、円い意味

のツブラと関係のある言葉です。

それがいつか略されて頭の古末



「独楽・高麗」となったのでは

ないかと言われています。コマ

が独楽の一般呼となるに至っ

て、ツグリは一部の特殊なもの

の名として残るようになり、今

日でも、東北から北陸にかけて

「ズグリ」とか「ズングリ」と呼ん

でいます。

古代の独楽はもっぱら宮庭儀

式に用いられ、やがて貴族の遊

具となり南北朝時代頃から子供

の遊具となりましたが、本格的

に民衆の中に浸透し遊ばれたの